

住井すゑと編集者

——新資料・佐野英夫の葉書から——

安達原 達晴

一 住井すゑと『橋のない川』

いうまでもなく、『橋のない川』^①は作家・住井すゑの代表作とされる。明治期以降を舞台に被差別部落に生きる人々を活写した、いわゆる大河小説である。文庫版まで含め、これまで累計三百万部以上を売り上げた。文庫は現在も版を継続中である。住井および『橋のない川』に関する最近の研究動向や展望は、後藤田和「住井すゑと『橋のない川』」（『昭和文学研究』第86集、二〇二三年三月）に詳しい。そこにも記されるように、住井の文学には再び光が当てられる傾向がみえ始めている。本作についても、従来とは異なる視座からの研究が待たれるだろう。

『橋のない川』は反差別、反天皇制の主張を明白に掲げる。こうしたメッセージは住井が本作の発表前後（特に「後」）に各種の対談、インタビュー、文章などで繰り返し語っている。そのため、本

作の存在を作者住井の強烈な個性が直接的に反映された、いわば分身そのものとみなす者も多いかもしれない。むしろ、そのような見方には妥当性がある。しかし一方で、出版・販売という流通のさなかで無数の読者に提供されていく商品でもある以上、本作の成立過程は住井ひとりの思考や判断のみで閉ざされているわけではけつしてないだろう。換言すれば、住井の独断のみで本作の執筆・発表が展開され続けたわけではないのである。

発表以来、『橋のない川』に膨大な読者がついた（ついている）ことは間違いない。長きに亘って多くの者に読まれているというこの意味は、作品自体のテーマや表現のみならず、歴史社会的な条件に基づき考える必要があるといえる。例えば、具体的な同時代状況やそこに生きる読者たちの在りよう、などである。いま稿者は同時代の読者たちとの関係性から本作を捉え直す作業を、漠然とながら構想中である。ただし、この企図を本格的に実行するためには、少なからぬ時間と労力を要する。本稿では遠大な企図のごく手始め

として、本作の最初の読者の一人ともいえる編集者との関わりから、『橋のない川』誕生の現場の一齣を覗いてみたい。

二 『橋のない川』と佐野英夫

作者である住井すゑ本人以外で、『橋のない川』の誕生に欠かすなかつた人物のひとつとして、佐野英夫がいる。佐野は新潮社出版部に所属する、編集者であつた⁽²⁾。佐野の名は石坂洋次郎、深田久弥、會津八一、吉田精一、山本健吉、亀井勝一郎らの著作中、あとかきの謝辞にみえる。新潮社の出版物に多く関わつた編集者といえる⁽³⁾。住井と佐野とのつながりは既に周知だが、あらためて確認しておく。

住井の夫である犬田卯は長い闘病の末、一九五七年七月に亡くなる。『橋のない川』第四部の「あとがき」⁽⁴⁾によれば、翌年に彼の遺骨の一部を青山の「無名戦士の墓」に合葬した住井は、そのまま部落解放同盟を訪れ、そこで紹介された京都の部落問題研究所を同年五月に訪問する。現地での交流に続き、さらに奈良市で開催の全国部落婦人集会にも参加した。その後の行動を、住井は同「あとがき」で次のように述べる⁽⁵⁾。

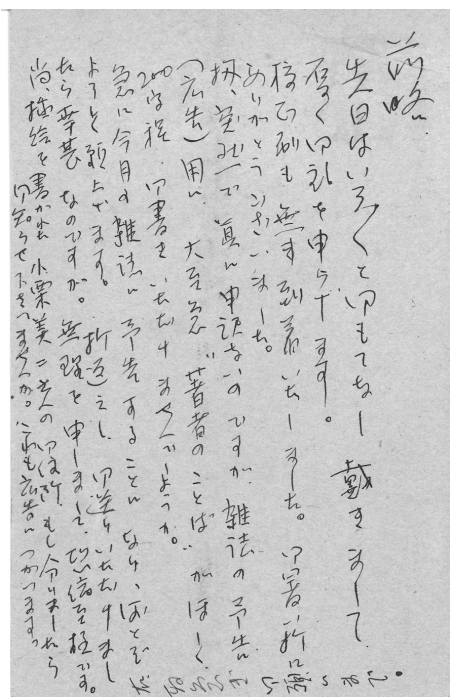
この旅行（京都、奈良への旅行——稿者）から帰ると、私は早速新潮社に佐野英夫氏を訪ね、これからテーマにしたいと考えている部落問題について語り、いつの日か作品に結集し得たならば……と、漠然とした形ながら出版の予約をしてもらった。というのは、佐野氏には『夜あけ朝あけ』の出版

以来、執筆について何かと相談にのつていただいていたからである。

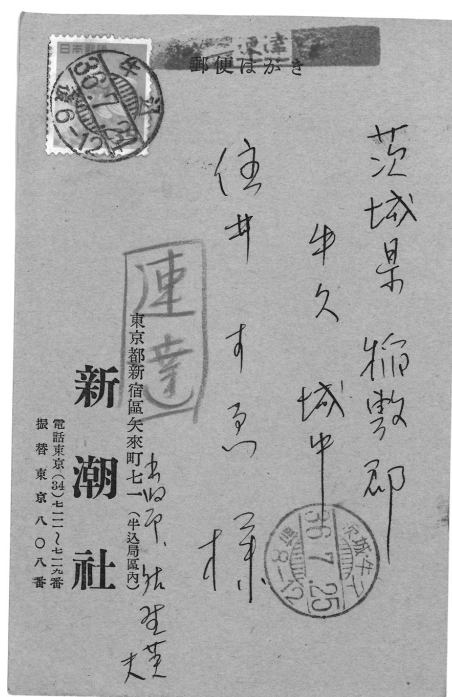
『夜あけ朝あけ』⁽⁶⁾は第八回毎日出版文化賞を受賞した、住井による児童文学作品中の代表作である。佐野との関係はこの作品以降であると住井はいう。「漠然とした形ながら出版の予約をしてもらった」という作品は、部落問題研究所の発行雑誌『部落』への連載⁽⁷⁾を経て『橋のない川』第一部となり、一九六一年九月に新潮社より刊行された。本作第六部の「あとがき」⁽⁸⁾で、佐野の名が再び登場する。

四部の「あとがき」にもふれたように、第一部、約九百五十枚は、雑誌『部落』に二年間連載していただいた。その間、編集担当の谷口修太郎氏には一方ならぬご協力、ご配慮をいただき、ために原稿の締切日が近づくと、怠惰を叱咤、驚馬に鞭を打って、なんとか紙数を満したことがあった。二部以降、書下ろし出版となつてからは、同じ状況が新潮社出版部、佐野英夫氏との間に展開。結局、佐野氏にはまる十三年間、創作の遅々たるペンにおつき合いをいただいた。

住井のことばからは佐野への一定の信頼、また住井の傍らで執筆を見守る佐野の姿を推察できる。次に、佐野のことばのほうから彼の助力の具体的なさまや両者の関係をみてみる。



図版2：①住井すゑ宛佐野英夫葉書 裏面



図版1：①住井すゑ宛佐野英夫葉書 表面

三 新資料・佐野英夫葉書と『橋のない川』第二部原稿

二〇一八年度から現在まで、茨城県牛久市教育委員会文化芸術課と東海大学文学部日本文学科が連携し、旧住井すゑ・犬田卯邸宅Ⅱ現牛久市住井すゑ文学館に残る膨大な資料群の調査研究を続けている。本稿では調査により新たに発見された、二通の住井すゑ宛佐野英夫葉書を紹介したい。まず一通目は、一九六一年七月二十四日のものである。

①住井すゑ宛佐野英夫葉書（官製郵便葉書 昭和三十六年七月二十四日消印）

表面（図版1）

茨城県稲敷郡牛久城中 住井すゑ様

東京都新宿区矢来町七一（牛込局区内） 新潮社 電話東京

（34）七一一一〜七一一九番 振替東京八〇八番（※以上、

印） 出版部 佐野英夫

裏面（図版2）

前略

先日はいろいろと御もてなし戴きまして

厚く御礼を申し上げます。

校正刷も無事到着いたしました。御暑い折に

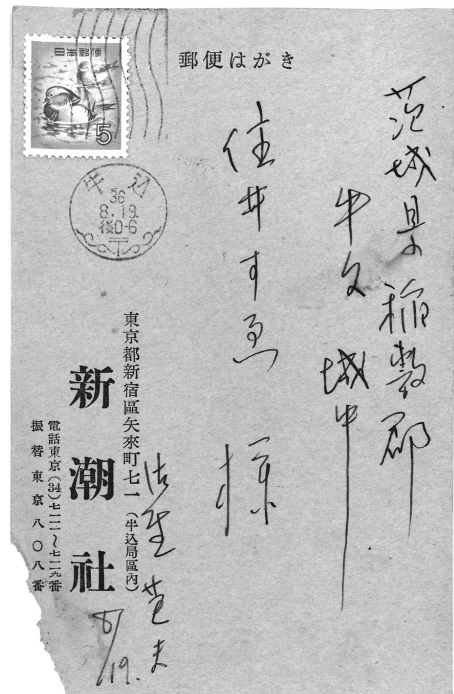
ありがとうございます。

扱、突然で真に申訳ないのですが、雑誌の予告

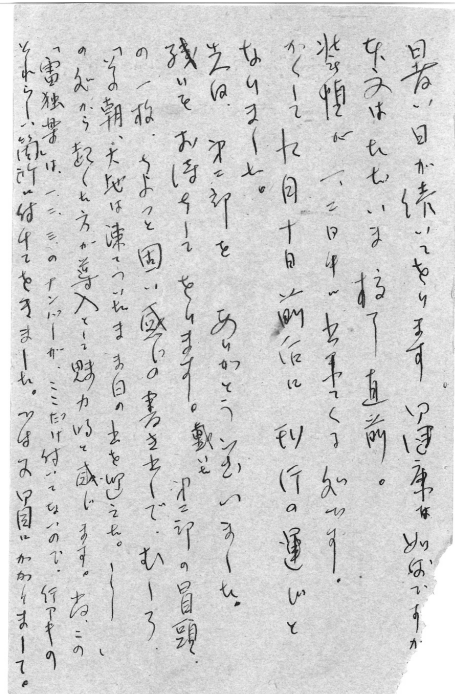
(広告) 用に、大至急、著者のことば、がほしく、200字程、御書きいただけませんか。
急に今月の雑誌に予告することになり、何とぞよろしく願ひ上げます。折返し、御送りいただけましたら幸甚なのですが。無理を申しまして、恐縮至極です。尚、挿絵を書かれた小栗美二さんの御住所、もし分りましたら御知らせ下さいませんか。これも広告につかいます。
(※以下、欄外) 右、取急ぎ御願ひまで。

表面には「速達」の朱書きがみえる。「校正刷」とは、葉書の日付および内容から一九六一年九月刊行の単行本『橋のない川』第一部のそれであることは明らかである。「雑誌の予告(広告)」、「著者のことば」についても『新潮』の一九六一年九月号と『小説新潮』同年一〇月号の新刊案内の頁に、該当するとおぼしき箇所を確認できる。いずれも同じもので、「住井すゑ 久々の新作長編」として『橋のない川』の広告が一頁分、掲載されている。住井による二百字強の「作者のことば」も、『部落』連載と同じ小栗美二による挿絵も付いている。本作第一部刊行を間近に控えた出版社側の空気をよく伝える一葉といえるだろう。臨場感はずの葉書にも強くあらわれている。一通目より四週間足らずで送られた、一九六一年八月十九日のものである。

②住井すゑ宛佐野英夫葉書(官製郵便葉書 昭和三十六年八月十九日消印)
表面(図版3)



図版3: ②住井すゑ宛佐野英夫葉書 表面



図版4: ②住井すゑ宛佐野英夫葉書 裏面

茨城県稲敷郡牛久城中 住井すゑ様

東京都新宿区矢来町七一（牛込局区内） 新潮社 電話東京
(34) 七一一一〜七一九番 振替東京八〇八番（※以上、
印） 佐野英夫 8/19

裏面（図版4）

暑い日が続いてをります。御健康は如何ですか
本文はただいま校了直前。

装幀が一、二日中に出来てくる処です。

かくして九月十日前後に刊行の運びと
なりました。

先日、第二部をありがとうございました。

残りを待ちしてをります。戴いた第二部の冒頭
の一枚、ちよつと固い感じの書き出しで、むしろ
「その朝、大地は凍てついたらままだの出を迎えた。――」

の処から起した方が導入として魅力的と感じます。尚、この
「雷独楽」は、一、二、三のナンバーが、ここだけ付いてないの
で、行アキの

それらしい箇所につけてをきました。では又御目にかかりまし
て。

『橋のない川』第一部は単行本奥付によれば、一九六一年「九月
十一日印刷」、同年「九月十五日発行」である。葉書の日付の時点
ではまさに「校了直前」、装幀は「一、二日中」の出来、「九月十日
前後に刊行の運び」とある通りだろう。そして、さらに注目したい

のは後半部分である。このとき既に住井によって本作第二部原稿の
一部分が書かれ、佐野のもとに送られていたことが分かるのであ
る。本作第二部は、やはり単行本奥付によると一九六一年一二月
二〇日の発行である。第一部刊行後から三ヶ月余りであり、長編作
品であることを考慮すれば当然、第一部刊行前より第二部の執筆が
開始されていたと想像はつく。しかし、実際に執筆が進められてい



図版5：『橋のない川』第二部原稿（半裁が右半分を覆った状態）



図版6：『橋のない川』第二部原稿（半裁をめくった状態）

た証拠となり、原稿をめぐる編集者とのやり取りが記されたこの葉書の価値は大きいといえる。

そのやり取りも実に興味深い。佐野は送られた第二部原稿の冒頭について意見を述べている。実は、牛久市住井さん文学館にはこの記述と対応するとみられる第二部原稿が存在する⁽¹⁰⁾。原稿は右半分が別の半裁の原稿用紙によりそっくり覆われ、この半裁は右上隅

を糊づけされていた（図版5）。最初に『続・橋のない川』住井さん」とあり以下、本文のポイント・字数・行数、割付、表記などに関する指定がなされている（ちなみに左半分の上段にも同様の指示が朱書きされている）。半裁の左半分には、第二部第一章の章題として記された「雷独楽」の文字に朱書きで割付が施されている。これらはおそらく、編集側の手によるものだろう。原稿用紙の左半分、「その朝、大地は」以下は第二部の完成作品と同じである。左上のノンブルは「2」である。

右半分を覆う半裁をめくると、推敲の痕跡が残る文章があらわれる（図版6）。左半分（第二部完成作品の冒頭）の一部分も含めて、次に掲げる⁽¹¹⁾。

た生命のままに、ただ生きるだけに過ぎなかった／であろう。

それが生命の不思議さに気がつき、／やがて現在の生命は過去から受けつ／いだものであり、更にその生命は新しい生命／を生んで未来につながるものなのを認識して、／ここに、時／を把握した／のではあるまいか。

それはともかく――。

その朝、大地は凍てついたらまた日の出を迎えた。大／正元年一月二十六日。そして或る人には、／皇紀二千五百七十四年の旧正月元旦だ／った。

さて、孝二は起きぬけ、家ののきばに一匹の足長蜘蛛を見つけた。（以下略）

この原稿の前に続くはずのノンブル「1」の存在はいまのここ

る、確認できない。途中からなので、この右半分の文脈は不明確である。それでも「生命」が過去、現在、未来へとつながっていく己の存在を自覚することで〈時間〉というものを認識するという、観念的なモチーフの展開が窺える。大正元年一月という新たな時から始まる第二部の枕として、当初こうした文脈が配された可能性はあるだろう。住井作品、特に『橋のない川』には雄大さや荘厳さを喚起する観念的な叙述がしばしばみられる¹²⁾。その意味ではこの枕の文章も本作全体から眺めれば、必ずしも突飛な表現ではないといえる。しかし一方で、たしかに佐野のいうように、「ちよつと固い感じの書き出し」にもみえる。

この原稿は編集側によるとみなせる指示書きなどから、入稿時のものと考えられる。半裁に隠された部分は抹消扱いとなり、完成作品の書き出しと合致する左半分が冒頭部として採用された。住井が初期の冒頭部を変更した理由については、佐野の助言をその大きな一つに数えられるだろう。

四 作品の書き出しをめぐる——まとめに代えて

一般に、作家にとって自作の書き出しがいかに重要であるかは容易に理解できる。また、『橋のない川』にかける住井の意気込みが並々ならなかったことは、もはや説明不要である¹³⁾。既に『部落』への連載を経て読者からの反応には手応えを得ていた¹⁴⁾とはいえ、第一部が未刊行であったことも心理に影響を与えたかもしれない。いずれにせよ、住井は第二部の冒頭を変更したのである。

ところで、牛久市教育委員会文化芸術課との共同調査で確認でき

た多くの重要資料の一つに、『橋のない川』第五部の書き出しとみられる草稿がある。これらは相当数存在し、第四部で一度完結した本作を新たに執筆するに際して住井が苦心したさまを想像させる¹⁵⁾。第五部同様、第二部の書き出しもまた、住井にとってはその一作品のみならず、以降も構想が続くシリーズ全体の行先を左右する分岐点であったはずである。入稿時のものらしき第二部原稿の不採用となった箇所からは、いったんは住井がその重要地点において自らの観念——大袈裟に言えば思想——を露わにした痕跡が窺える。こうした観念性を取って後退させ、大正元年一月の畑中家の日常を物語の入口とした住井の選択には、繰り返すが佐野英夫の「ちよつと固い感じの書き出し」ということが関わっていたと考えられるのである。だとするなら、このとき『橋のない川』第二部誕生の現場には、住井すゑという〈作者〉の他に佐野英夫というひとりの編集者——〈読者〉もまた確実に立ち会っている。さらにいえば、自身の選択をなすにあたり、住井は佐野に限らず無数の〈読者〉たちの群れを意識しただろう。

今回取り上げたケースは、分量的には僅かなものとどまるといえる。しかし、編集者、ひいては〈読者〉全般と『橋のない川』をはじめとした住井作品との関係をみつめる作業は、住井作品を新たな角度から照らす契機となり得る。牛久市住井すゑ文学館で整理が進められる膨大な書簡類は、住井文学の研究の可能性をさらに切り拓く大きな可能性を秘めている。

注

- (1) 第一部は部落問題研究所の機関誌『部落』に一九五九年（昭和三四）一月から一九六〇年（昭和三五）一〇月まで連載後、一九六一年（昭和三六）九月に新潮社より刊行。同年二月の第二部以降は新潮社からの書下ろしとなり、一九六四年（昭和三九）四月の第四部をもって一旦、完結するが、その後一九七〇年（昭和四五）十一月の第五部、一九七三年（昭和四八）十一月の第六部へと書き継がれる。さらに、一九九二年（平成四）に第七部が発表された。なお、牛久市住井すゑ文学館には、冒頭に「橋のない川（第八部）／＼」は改行を示す」とのみ記された一枚の原稿用紙が残っている。
- (2) 『新潮社七十年』（一九六六年一月）巻末の社員名簿に氏名を確認できる。
- (3) 佐野英夫については、北条常久『橋のない川 住井すゑの生涯』（二〇〇三年五月、風濤社）にも詳しく述べられている。
- (4) 『橋のない川』第四部単行本（前掲注（1）参照）、二九四―二九五頁。
- (5) 引用は前掲注（4）に同じ。
- (6) 一九五四年六月、新潮社。一九五六年に映画化、のち舞台化もされた。
- (7) ちなみに、連載を行った動機として、住井は同じく第四部「あとがき」で次のように述べる。「ところが、いざ作品をめざしてペンを執ろうとして、はたと感じるのは問題の大きさであり、ひしと身にしみるのは己が非才である。そこで問題の勉強に励む一方、作品は一応部落問題研究所発行の雑誌『部落』に連載していただいて大方の批判を仰ぐ途をとった。」（引用は前掲注（1）の単行本、二九五頁、傍点・ルビは原文通り）。
- (8) 『橋のない川』第六部単行本（前掲注（1）参照）、二七七頁、傍点は原文通り。
- (9) ただし当初、七月付の葉書に「今月の雑誌」とあるため八月号と考えたが、いまのところは新潮社刊行の雑誌に『橋のない川』の広告を確認できない。
- (10) この第二部冒頭原稿の存在については、既に『牛久市住井すゑ文学館図録』（二〇二二年一月、牛久市文化遺産活用実行委員会・牛久市教育委員会）、一七頁に写真付き（本稿の図版5のみ）で紹介されている。
- (11) 抹消された箇所は除き、確定した記述のみを活字化した。文中、「／＼」は改行を示す。
- (12) 例えば本作第六部「鵲」の章、主要登場人物の畑中孝二と彼の従妹である峯村七重が会話する場面など。
- (13) それでも取えて述べるなら、ごく一例として、本稿でも引用した本作第四部と第六部の「あとがき」にある住井自身の言動や本作の詳しい執筆経緯を記した前掲注（3）の北条著、飛鳥川みつき「犬田卯・住井すゑ『昭和三十二年日記』翻刻・解題」（『東海大学 日本語・日本文学 研究と注釈』第八号、二〇二四年三月）などが参照可能。なお、飛鳥川の翻刻・解題による『昭和三十二年日記』は、共同調査により発見された新資料である。

(14) 前掲注(3)、北条著中「10『橋のない川』第一部」など。

(15) 本稿における『橋のない川』第五部冒頭に関わる記述は、牛久市文化遺産活用実行委員会より東海大学文学部日本文学科が二〇一九年度に受託した「令和元年度 牛久市の文学およびその関連資料についての調査研究」(研究代表者・伊藤一郎、以下、安達原達晴、千金栄健、早乙女牧人、飛鳥川みつき、木本拳周が参加)の報告書、「牛久市の文学およびその関連資料についての調査研究 旧住井すゑ邸所蔵資料調査報告書」(二〇二〇年三月、現時点では非公開、執筆者は木本以外同上)の一部(執筆担当は安達原)による。

※本稿は、科学研究費助成事業「旧住井すゑ・犬田卯邸宅資料の調査研究に基づく〈文学と社会〉の包括的考察」(基盤研究(C)22K00348)の成果の一部である。

※本稿の執筆にあたり、茨城県牛久市教育委員会文化芸術課の飛鳥川みつき氏には資料画像の提供や構想への助言など、多くのご高配を賜った。この場を借りてお礼を申し上げる。

Abstract

Examining the Relationship Between Sue Sumii and the Editor of *The River With No Bridge* Based on New Documents: Postcards from Hideo Sano

ADACHIBARA Tatsuharu

The River With No Bridge is one of Sue Sumii's masterpieces. It is an epic novel set in the Meiji period (1868-1912) that depicts the lives of the discriminated-against Buraku people. It became a bestseller, and the paperback edition is still available.

This work is clearly anti-discrimination and anti-emperor. Many people see the protagonist as Sumii's alter ego, which reflects her strong personality. Although this view is valid, the work is also a product that was published, sold, and offered to readers. Its formation process was not based solely on the author's thoughts and judgments.

This paper reconsiders the work from the viewpoint of its relationship with contemporaneous readers. The paper begins by examining the work's origins, with reference to its relationship with its editor, who can be considered the first reader of *The River With No Bridge*. Specifically, we will examine two postcards addressed to the author from Hideo Sano, who was employed by the book's publisher, Shinchosha, and was in charge of Sumii.